

## この1冊を —特集によせて—

本号の特集「協同による地域福祉の前進を」によせて、関連する文献図書を紹介します。本号執筆者の著作、手軽に読めて、手に入れやすいものを中心にしました。

高齢者福祉にとって在宅でのケアを確立することは緊急に求められている課題です。この点で、老人医療の推移も入れ社会的ケアの必然性を説いているのが、太田貞司著『在宅ケアの条件』（自治体研究社 ☎03-3451-1061、1992年）です。長年の福祉現場の経験や実態調査をベースにしたもので、ゴールドプランの問題点が浮き彫りになってきます。岡本祐三著『医療と福祉の新時代—「寝たきり老人」はゼロにできる』（日本評論社、1993年）は阪南中央病院での地域医療の実践をもとに、医療と福祉の構造的連携を主張しています。デンマーク、アメリカの対比ももりこみ社会経済的側面からのアプローチは魅力あるものです。

地域医療との連携は在宅ケアの大事な課題です。本号の柳原病院の取り組みは、増子忠道、太田貞司著『病院がひらく都市の在宅ケア—柳原病院・20年の地域医療の挑戦』（自治体研究社・ブックレット、1993年）に歩みも含め簡潔にまとめられています。ここの訪問看護は宮崎和加子著『看護婦は自転車に乗って』（筑摩書房、1993年）を、さらに深く知りたい方へは、増子忠道著『地域医療の現場から』（勁草書房、1985年）、大沼和加子、佐藤陽子著『家で死ぬ』（同、1989年）、宮崎和加子、龍良子、今久仁子著『訪問看護ステーション』（医学書院、1993年）がおすすめです。

柳原病院が都市部ならば、長野県佐久総合病院は農村地域で地域医療に取り組むところです。若月俊一、井益雄著『高齢化社会の在宅ケア—佐久総合病院の実践』（岩波書店・ブックレット、1991年）が手軽に読める1冊です。この地の地域福祉運動の記録としては、依田発夫編『在宅ケアの生きるまち—小諸・北佐久の挑戦』（自治体研究社、1991年）があります。最近では、若月院長

の医療思想をおったもので、南木佳士著『信州に上医あり—若月俊一と佐久病院』（岩波書店・新書、1994年）が刊行されました。

在宅ケアを支えるものにホームヘルプはかかせません。その専門性、集団性、協同性（コーディネート）を提起したものに、木下安子、在宅ケア研究会編著『ホームヘルパーは「在宅福祉」の要』（萌文社 ☎03-3260-0181、1990年）、『続・ホームヘルパーは「在宅福祉」の要』（同、1991年）があります。さらに、介護福祉を科学的に系統的に「学」として確立しようというものに、一番ヶ瀬康子監修『介護福祉学とは何か』（ミネルヴァ書房、1993年）もあります。

在宅ケアをおっていくと、高齢者の食や生活用品、福祉器具等が引き続いて課題となって登場してきます。その中心に住まいの問題があり、住環境の整備なくして在宅の保障はありえません。

『建築とまちづくり—特集・高齢者の自立生活と住宅改善をさぐる』（1994年1月号、新建築家技術者集団・機関誌 ☎03-5351-2166）は建築、まちづくりの専門家研究集団からの取り組みと事例が豊富に掲載されています。

また在宅と施設の福祉を結ぶという大切な課題もあります。市川禮子著『ああ、生きてる感じや！—喜楽苑のめざすノーマライゼーション』（自治体研究社・ブックレット、1993年）は施設のあり方に一石を投げ、ここから多様な地域密着型の施設への展望が見えてきます。

最後に、高齢者が社会に位置づくために、高齢者の発達観の新しい研究が始まっています。高橋恵子、波多野諺余夫著『生涯発達の心理学』（岩波書店・新書、1990年）は魅力にあふれた1冊です。『自己の確立、と『愛情のネットワーク』という協同性の考え方は、高齢者自身が主体となる高齢者協同組合の取り組みにも示唆多きものがあります。

（文責：広瀬謙一）